

タイトル	ロシア語における品詞分類の変遷と数詞の誕生
著者	鈴木, 理奈; SUZUKI, Rina
引用	北海学園大学人文論集(71): 81-96
発行日	2021-08-31

ロシア語における品詞分類の変遷と数詞の誕生

鈴木 理 奈

1. はじめに

数量表現はあらゆる言語に存在するものである。しかし品詞考察の観点から、数を示す語はすべての言語で一様な品詞分類がなされているわけではなく、数詞の品詞カテゴリーを持つ言語もあれば、持たない言語もあるといえよう。また、数詞の持つ性質から、一つの言語の中においても、数を示す語は複数のカテゴリーに領域を有する事がありえる。

ロシア語における数詞の扱いは多様かつ複雑であり、現代ロシア語において *один, два, три* などの個数詞は数詞, *тысяча, миллион* などのいくつかの個数詞は名詞, また *первый, второй* などの順序数詞は形容詞に分類¹されている。С.И. Ожегов, Н.Ю. Шведова のロシア語詳解辞典「Толковый словарь русского языка」によると、“数詞は、数量または数量的特徴や、対象物の数的順序を示す語（名詞または形容詞）。個数詞（数量を示す数詞：*два, пять, десять* など）。順序数詞（数量関係的特徴を示す数詞：*второй, пятый, десятый* など）。”²と記されている。

ロシア語文法において、このような数詞が独立した品詞分類をされるようになったのは比較的近年の事である。また、ロシア語文法の歴史を遡っ

¹ Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.445, С.152, С.811, С.499, С.107, С.356, С.818

² Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.885

てみると、かつては現在の品詞分類とは異なるものであった事が確認できる。本稿では、各時代における歴史的な文書を辿り、ロシア語の品詞分類の変遷に併せて、品詞としての数詞の出現に至る過程の考察を行いたい。

2. 18世紀の文法研究

ロシア語における品詞分類は時代とともに大きな変遷がみられ、中でも数詞は様々な位置付けをされてきた。現代ロシア語における一般的な解釈による分類では、品詞は「名詞」、「形容詞」、「数詞」、「代名詞」、「動詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」、「助詞」、「感嘆詞」の10個³とされている。数詞は独立した品詞の扱いとなっているが、そこに至るまでの過程には紆余曲折があり、ロシア語文法における数詞の研究については様々な見解も生じた。

最初の本格的なロシア語文法書となる M.B. Ломоносов 著「Российская грамматика」(1755 г.) では、すべての語は8個の品詞に分類できるとした上で、「名詞」、「代名詞」、「動詞」、「形動詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」、「感嘆詞」が挙げられている⁴。M.B. Ломоносов の文法書において名詞 *имя* は、実名詞 *имя существительное* を主としてそこに形容詞 *имя прилагательное* を含むという見方がされており、数詞 *имя числительное* はその名詞 *имя* 内に置かれている。つまり数詞は個別の品詞カテゴリーとしては分類されていなかったわけであるが、M.B. Ломоносов の考えによると、数詞は名詞 *имя* の品詞分類に含まれる⁵として数詞の存在自体は認めており、その性

³ Подробно см. Русская грамматика: В 2 т./ Гл. ред. Н.Ю. Шведова. М., 1980. Т1, С.455

⁴ Подробно см. Ломоносов М.В. Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.26

⁵ Подробно см. Ломоносов М.В. Российская грамматика. СПб., 1755–1757 гг. С.211–212

質などについては名詞の部において、個別の章で考察を行っている。数詞は名詞などと似通った性質も見て取れる為、名詞 *имя* の括りに扱われる事は納得できうるものではある。ただ一方で、数詞には *вдвое, трижды* などの副詞的な語もありえる為、必ずしも名詞 *имя* においてすべてが網羅できるとは限らないともいえるであろう。

М.В. Ломоносов は文法書の中で、“数詞には *один, пять, одиннадцать* などの非派生的数詞と、*первый, пятый, одиннадцатый* などの派生的数詞が存在し、またそれぞれに単純数詞と複合数詞の形がある”⁶と記している。現代ロシア語において数詞は、意味的および構成的要素により分類できると考えられ、一般的に意味的には、個数詞 *пять* など、順序数詞 *пятый* など、集合数詞 *пятеро* など、分数詞 *одна пятая* など、また構成的には、単純数詞 *пять, пятый* など、複合数詞 *пятнадцать* など、合成数詞 *пятьдесят один* など、が挙げられる。М.В. Ломоносов の時代においては、個数詞、順序数詞などによる数詞の種類分けが、非派生的数詞、派生的数詞として大別され、それに相当するものとなっている。ただし М.В. Ломоносов の分類を見ると、非派生的数詞は *пять, пятнадцать, пятьдесят* などの個数詞で、派生的数詞は順序数詞 *третий* などの他に、集合数詞 *трое* などや、分数詞 *полтретья* なども含まれるものとなっており、現代ロシア語における分類よりも広義的な大分類の形が取られている。また、非派生的数詞つまり個数詞の *один, два, три, четыре* の格変化について М.В. Ломоносов は、“*два, три, четыре* の数詞は形容詞の複数形、*один* の数詞は形容詞の単数形、その他の数詞は名詞の女性単数形のように格変化する”⁷と指摘し、一部の個数詞は格変化形が他とは異なり一様ではない事にも言及している。

現代ロシア語の品詞分類と比較してみると、上記のように当時の М.В. Ломоносов の分類では実名詞 *имя существительное*、形容詞 *имя*

⁶ Ломоносов М.В. Российская грамматика. СПб., 1755-1757 гг. С.101

⁷ Ломоносов М.В. Российская грамматика. СПб., 1755-1757 гг. С.102

прилагательное, 数詞 *имя числительное* を名詞 *имя* の括りとして纏めており、数詞 *имя числительное* は実名詞 *имя существительное* を中心とした名詞 *имя* の品詞カテゴリーに含まれていた事が分かる。

3. 19世紀前半の文法研究

19世紀初めには、帝国科学アカデミーによって「*Российская грамматика*」(1802 г.) が出版され、この文法書の中で、“ロシア語を構成するすべての言葉は「名詞」、「代名詞」、「動詞」、「形動詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」、「感嘆詞」の8つの品詞に分類される”⁸と記されており、品詞体系はM.V. Ломоносовの見解を基本的に踏襲する形が取られている。各々の品詞は個別の章で考察されているが、形動詞 *причастие* の章には副動詞 *деепричастие* も加えられている。また名詞 *имя* は、実名詞 *имя существительное*、形容詞 *имя прилагательное*、数詞 *имя числительное* を総称する品詞⁹として、これらすべては一つの枠内に収められているが、数詞を始めとするそれぞれは個々の章に分けられて、性質、形態、格変化などについて考察が行われている。しかしやはり、数詞の概念は存在するものの、ここでも数詞は独立品詞としての分類はなされていない。

帝国科学アカデミーの「*Российская грамматика*」によると、“数詞には、*первый, второй* などの形容詞と *один, два* などの名詞があり”¹⁰、また数詞の特徴によって“個数詞、順列数詞、複雑性を示す数詞、分数”¹¹の4つに分

⁸ Подробно см. *Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею*. СПб., 1802. С.39

⁹ Подробно см. *Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею*. СПб., 1802. С.42-43

¹⁰ *Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею*. СПб., 1802. С.131-132

¹¹ *Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею*. СПб., 1802. С.132

けられ、“順列数詞は形容詞のように、個数詞は名詞のように格変化する”¹²と指摘されている。数詞の意味的要素による分類に関しては前述のように、現代ロシア語では個数詞、順序数詞、集合数詞、分数となっており、上の分類の形とは若干違いが見られる。集合数詞は *двое, трое* などの語によるものであるが、ここで言う“複雑性を示す数詞とは、*тройной, тройственный* など乗数的に事物の数量を示すもの”¹³とされており、それとは意味合いが異なる。また、М.В. Ломоносов の時代には、非派生的数詞、派生的数詞と呼ばれる語によりなされた意味的な数詞の種類分けは、個数詞 *количественные числительные*、順序数詞 *порядочные числительные* へと変わり、現代ロシア語の用語名に近付いた所がある。ただし、現代ロシア語で *порядковые числительные* と呼ばれる順序数詞は、この時には“列”、“順序”の意味を語根とする語による *порядочные числительные* と言われており、現在とまた少し異なる名称が用いられている。

帝国科学アカデミーによる文法書の刊行後、Н.И. Греч は著書「Практическая русская грамматика」（1827 年）および「Начальные правила русского языка」（1828 年）の中で、品詞を「名詞」、「形容詞」、「代名詞」、「動詞」、「形動詞」、「副詞（および副動詞）」、「前置詞」、「接続詞」、「感嘆詞」の 9 つに分類し^{14,15}、また「Начальные правила русского языка」は改訂版 10 版目以降から書名が変更されたが、それに続く著書「Краткая русская грамматика」（1857 年）でも同様に 9 つの品詞に分けて¹⁶ それぞれの考察を

¹² Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.134

¹³ Российская грамматика: Сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С.133

¹⁴ Подробно см. Греч Н.И. Практическая русская грамматика. 2-е изд., исправленное. СПб., 1834. С.23

¹⁵ Подробно см. Греч Н.И. Начальные правила русской грамматики. 9-е изд., исправленное. СПб., 1842. С.4

¹⁶ Подробно см. Греч Н.И. Краткая русская грамматика. 10-е изд.,

行っている。Н.И. Гречによる品詞分類はそれ以前の文法書とは異なる箇所が見られ、それまでにあった名詞 *имя* の品詞から実名詞 *имя существительное* と形容詞 *имя прилагательное* が分けられて、9品詞の体系になっている。しかしながら、“数詞は名詞および形容詞の2つの章に追加”^{17,18}として、形容詞の章内において付随する個別の区分で扱われており、名詞 *имя* からの分離は実名詞 *имя существительное* と形容詞 *имя прилагательное* のみとなっている。また数詞の性質についてН.И. Гречは、“数詞には対象物の数を表す個数詞と、対象物の順を表す順列数詞がある”¹⁹として、いくつかの数詞を例に上げながらその格変化にも着目し、“数詞には名詞または形容詞があり、*сорок, сто, миллион*などは名詞、*один, два, первый*などは形容詞である”²⁰と述べている。Н.И. Гречの文法研究においては、名詞および形容詞が個々の品詞に分類されるなど、現代ロシア語の品詞分類に一部近付いた部分があるものの、数詞の扱いや解釈については基本的にМ.В. Ломоносовや帝国科学アカデミーの文法書と大きく変わらず、名詞類の範疇に留められている。

一方、А.Х. Востоковは「Сокращённая русская грамматика」(1831 г.)の中で、“ロシア語のすべての言葉は「名詞」、「形容詞」、「代名詞」、「動詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」、「感嘆詞」の8つの分類から成る”²¹と述べている。М.В. ЛомоносовやН.И. Гречと異なり、ここでは形動詞が個別の品

исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.4

¹⁷ Греч Н.И. Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.32

¹⁸ Греч Н.И. Начальные правила русской грамматики. 9-е изд., исправленное. СПб., 1842. С.31

¹⁹ Греч Н.И. Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.32

²⁰ Греч Н.И. Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.33

²¹ Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.7

詞から外されており、また М.В. Ломоносов と比較すると、А.Х. Востоков は Н.И. Греч と同様に、名詞と形容詞を個々に分けている事が確認できる。А.Х. Востоков は形容詞をさらに指標によってグループ分けしており、著書の初版では“質、物主、数量の3つの分類”²²に、改訂版（1837 г.）では“質、物主、数量、活動の4つの分類”²³に、改訂版（1852 г.）では“質、物主、関係、数量、活動の5つの分類”²⁴に見直されているが、いずれにせよ数詞を形容詞の章内の節において考察している。その上で、“対象物の数量的意味を示す数詞は、*один, два, сто*などの個数詞と、*первый, второй, сотый*などの順列数詞に分けられ”^{25, 26, 27}、“格変化の側面から *один, два, три, четыре*の個数詞は他の形容詞と、*пять, шесть, семь*などの個数詞は名詞と近似性がある”^{28, 29, 30}と指摘しており、名詞と似通った数詞の性質についても部分的に言及している。

このように、19世紀前半の時代においても数詞はまだ独立した品詞としての扱いはなされていなかったわけであるが、数詞は品詞的に名詞でも形容詞でもあるとの指摘がされる一方で、19世紀前半における文法研究の特徴として見られるのは、名詞と形容詞を分離させた事で数詞は大きく形容詞の品詞カテゴリーに入れて分類する見解が出てきた点である。

²² *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.26–27*

²³ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.25*

²⁴ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.15*

²⁵ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.34*

²⁶ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.31*

²⁷ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.18–19*

²⁸ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. СПб., 1831. С.41*

²⁹ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика. 4-е изд., СПб., 1837. С.37*

³⁰ *Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.22–23*

A.X. Востоков は *пять* 以上の個数詞と名詞との近似性³¹ を挙げながらも *один, два, три, четыре* の個数詞の形態的特徴に意識を向け、数詞を形容詞として分類しているが、名詞的性質を併せ持つ数詞を形容詞の枠内に収めるには若干難しい部分も見受けられる。

4. 19世紀半ば～後半の文法研究

そして遂に、И.И. Давыдов は帝国科学アカデミーから出版した文法書「Грамматика русского языка」(1849年)において、数詞を他の品詞から分離させ、独立した品詞として分類を行った。本研究による調べでは、これがロシア語文法において初めての品詞としての数詞の登場であると認められる。

И.И. Давыдов は、品詞を「動詞」、「名詞」、「形容詞」、「代名詞」、「数詞」、「前置詞」、「接続詞」、「副詞」の8つに分類³² し、それぞれの性質について各章で個別に分析を行っている。数詞は独立品詞の一つとして品詞体系が形成される一方、それ以前の品詞分類に見られた感嘆詞についてИ.И. Давыдов は、“感嘆詞はすべての言語に共通し同様に存在しながらも、文中において必要不可欠な要素を構成するものではない為、品詞には含まれない”³³ との見解を示している。名詞については、*имя* と *имя существительное* の用語が併用されており、品詞分類では *имя*、章立てでは *имя существительное* となっているが、ここでは同義的な捉え方がなされ

³¹ 詳細に см. *Востоков А.Х.* Русская грамматика Александра Востокова, по начертанию его же Сокращённой грамматики, полнее изложенная: Изд 10-е, исправленное., СПб., 1859. С.57

³² 詳細に см. *Давыдов И.И.* Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.39-40

³³ 詳細に см. *Давыдов И.И.* под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.40

ている³⁴。また数詞に関する記述では、Н.И. Греч や А.Х. Востоков の文法書と比較すると、数詞の意味、構造、格変化、文中の語の配置などに関してより広い考察が展開されており、さらに И.И. Давыдов の研究においては、ロシア語においてだけでなく、スラヴ語、ギリシア語、ラテン語などインド・ヨーロッパ語族の他言語との数詞の比較や、言語的語源の考察を行うなどといった特徴も見られる。

数詞の章において И.И. Давыдов はまず初めに、“すべての従属的品詞の中において、数詞は意味的に代名詞により近い”³⁵と述べている。И.И. Давыдов によると、“代名詞は事物を指示的、帰属的、制限的に定める意味合いを持つとされ、定義が入り乱れて代名詞の分離や、形容詞および数詞との混同といった不一致が起きている”³⁶との指摘がなされている。現代ロシア語において“代名詞は、対象物またはその指標を示し、対応する名詞、形容詞、数詞、副詞を代用する語”³⁷と定義されており、一部の代名詞 *сколько, столько* などは数詞との関連性³⁸が認められるのは周知の事実である。一方で、И.И. Давыдов は数詞と代名詞の異なる点についても挙げ、“数詞は代名詞 *я, ты, кто* などのような名詞的な形において存在自体を表わすのではなく、*три яблока, десять деревьев* などのような形容詞的な形において定義される対象物の数量関係を示す”³⁹と記しており、代名詞との

³⁴ Подробно см. Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.39-40, 70

³⁵ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.153

³⁶ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.131

³⁷ Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.352

³⁸ Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.724, С.770

³⁹ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения.

限定的な近似を指して言及している事が伺える。このような数詞と代名詞との近似性に関する指摘は、それまでの文法研究にはなかった新しい見解である。

И.И. Давыдов は数詞の性質について詳しく分析しており、“数詞には対象物の定量を表す定数詞 *три, четыре, пять* などや、不可分の多数を表す不定数詞 *многие, немногие* などがあり、さらに定数詞には対象物の数を表す個数詞 *один, три, десять* などや、任意の対象物が次の対象物へと続く順を表す順序数詞 *первый, третий, десятый* などがある”⁴⁰と指摘している。興味深い事に И.И. Давыдов はこれらの数詞を、現代ロシア語と同じ形にあたる *количественные числительные* 個数詞, *порядковые числительные* 順序数詞と名付けている。順序数詞に関してはそれまで順序数詞 *порядочные числительные* と呼ばれていた所、これに端を発し、個数詞, 順序数詞と用語の呼び名が変わり、これが現代ロシア語においても定着して行ったと見られる。

さらに数詞の形態に関して И.И. Давыдов は、“数詞は名詞 *десяток* など、形容詞 *десятый* など、副詞 *трижды* などの形により成る”⁴¹と指摘している。また“ロシア語における数詞の格変化は、名詞や形容詞から何らかの逸脱を伴いつつ借用され、個数詞は名詞に、順序数詞は形容詞に従う”⁴²と述べながら、ただし“個数詞 *один, одна, одно* については、一部 *одна* の複数形で異なる部分はあるものの代名詞 *сам* と同じように格変化をし”⁴³、個

СПб., 1849. С.154

⁴⁰ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.155

⁴¹ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.155

⁴² Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.159

⁴³ Подробно см. Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.159

数詞 *два, три, четыре* などは特定の格変化形を持つとして、それぞれの数詞の格変化の違いについても言及している。この *одна* の変化形の指摘に関して補足すると、現代ロシア語では複数形に性は持たないとされているが、当時のロシア語文法においては男性形 *один* および中性形 *одно* と、女性形 *одна* のそれぞれに複数形の型が存在し、双方は *одни, одна* と綴り字に *и, ъ* の異なりがあった事を示すものである^{44, 45}。

特筆すべき点として、И.И. Давыдов は“一般的に文法書において数詞は形容詞の中に入れられ関連付けされているが、数詞は形容詞に帰属されるものではない事は明らかである”⁴⁶ と、当時の文法書での慣例的な数詞の分類扱いについて異論を呈し、さらに“数詞は従属的要素の中でも特別な言語的要素を成すものである”⁴⁷ と極めて重要な指摘をしている。

また、И.И. Давыдов は後に出版した著書「Опыт общесравнительной грамматики русского языка」（1852 年）の中で自身の考えを発展させているが、品詞の分類や数詞の考察に関しては、先行著書の「Грамматика русского языка」から特に大きな変更点は無く、基本的に同じ内容に3か所ほど補足が加えられる形となっている⁴⁸。

上述のように、И.И. Давыдов は数詞を独立した品詞として扱う分類を行い、品詞分類体系に関しても現代ロシア語により近いものとなっている。

⁴⁴ Подробно см. Греч Н.И. Краткая русская грамматика. 10-е изд., исправленное и дополненное. СПб., 1857. С.34

⁴⁵ Подробно см. Востоков А.Х. Сокращённая русская грамматика: вновь пересмотренная сочинителем и короче изложенная: со второго издания. М., 1852. С.23

⁴⁶ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.160

⁴⁷ Давыдов И.И. под ред. Грамматика русского языка: Изд. 2-ого отделения. СПб., 1849. С.160

⁴⁸ Подробно см. Давыдов И.И. Опыт общесравнительной русской грамматики. СПб., 1852.

また、数詞の性質についても多面的で詳細な考察を行っており、数詞およびロシア語文法の研究の発展に貢献した功績は大きいといえるであろう。

И.И. Давыдов の文法書が発表された後には、数詞を独立した品詞として分類を行う文法書が他にも散見されるようになる。Ф.И. Буслаев は「Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей」(1858 г.)の中で、“ロシア語の品詞は9個あり、「動詞」、「代名詞」、「名詞」、「形容詞」、「数詞」、「副詞」、「前置詞」、「接続詞」、「感嘆詞」が挙げられる”⁴⁹と記しており、数詞は独立した品詞として分類されている。

Ф.И. Буслаев の考えによると、“数詞は意味的および構成的要素に分類でき、意味的要素には *пять, десять* などの個数詞と、*пятый, десятый* などの順序数詞があり、さらに個数詞には *двое, пятеро* などの集合数詞や *полтора* などの分数詞も属するとされ、また構成的要素には *три, пять* などの非派生的数詞、*третий, пятый* などの派生的数詞、*одиннадцать, двадцать один* などの複合数詞があり、非派生的数詞には *три, пять* などの個数詞、派生的数詞には *третий, пятый* などの順序数詞、そして個数詞の中でも *трое, пятеро* などの集合数詞は派生的数詞に属する”⁵⁰とされる。Ф.И. Буслаев は意味と構成の双方の視点から数詞の種類分けを試みているが、現代ロシア語と比較するとその分類にはやや違いも見られる。とりわけ構成的分類に関して、現代ロシア語においては前述のように、単純数詞 *два, второй, двое* など、複合数詞 *девятьсот, восьмидесятый* など、合成数詞 *сто один, двести второй, одна пятая* などにより成るとされるが、Ф.И. Буслаев の構成的分類では非派生的数詞、派生的数詞、複合数詞となり、またそれに該当する数詞として“個数詞は非派生的数詞に、順序数

⁴⁹ Буслаев Ф.И. Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей. Ч1-2. М., 1858. Ч2, С.44

⁵⁰ Буслаев Ф.И. Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей. Ч1-2. М., 1858. Ч1, С.129

詞および分数詞は派生的数詞に属する⁵¹と記されており、それぞれの構成的性質の解釈は異なるものとなっている。さらに Ф.И. Буслаев は数詞の形態的特徴について、“すべての順序数詞 *первый, второй* などは形容詞の形、ある個数詞 *пять, сто* などは名詞の形を取り、またある個数詞 *один* は代名詞と関連し形成されており⁵² “*один* は代名詞、*пять, сто* などは名詞、*пятый* などは形容詞の形で格変化をする⁵³と述べ、前述の И.И. Давыдов と同様に、数詞 *один* の代名詞との関わりを指摘している。数詞 *один* については、文法書において複数の見方が示されているが、形容詞と同様の格変化という考えに加え、代名詞と同様の格変化という考えも見受けられる。なお、С.И. Ожегов, Н.Ю. Шведова の「Толковый словарь русского языка」によると、意味的な用法における *один* は、数詞、形容詞、代名詞⁵⁴の性質を持つとされている。

また Ф.И. Буслаев のこのような数詞の見解については、後続の著書「Историческая грамматика русского языка」（1863 年）においても、基本的に変わらずほぼ同内容による記述となっている⁵⁵。

その後出版された А.А. Потебня による「Из записок по русской грамматике」（1874 年）では、主に思考と言語の相関関係という側面からの独創的な考察が展開されており、それまでとやや異なる切り口の文法理論となっている。А.А. Потебня は伝統的な文法用語を用いた品詞分類の列

⁵¹ Буслаев Ф.И. Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей. Ч1-2. М., 1858. Ч1, С.129

⁵² Буслаев Ф.И. Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей. Ч1-2. М., 1858. Ч1, С.129

⁵³ Буслаев Ф.И. Опыт исторической грамматики русского языка: учебное пособие для преподавателей. Ч1-2. М., 1858. Ч1, С.232

⁵⁴ Ожегов С.И. и Шведова Н.Ю. Толковый словарь русского языка. 4-е изд., дополненное. М., 2001. С.445

⁵⁵ Подробно см. Буслаев Ф.И. Историческая грамматика русского языка. 2-е изд., переделанное. Ч1-2. М., 1863.

挙という記し方はしていないが、「名詞」、「形容詞」、「数詞」、「代名詞」、「限定詞」、「動詞」、「接続詞」、「前置詞」の項目に分けて各章でそれぞれの考察がされており^{56,57}、数詞も個別の扱いがなされている。この中における限定詞 *член* は、A.A. Потебня の考えによると、指示代名詞より広義の用法を持つ語となる⁵⁸。数詞に関する記述では、“既にスラヴ語の古い文献において個数詞は形容詞と名詞の2つの部類に分けられていた”⁵⁹とあり、それらの異なる格変化形などに触れられている。また、A.A. Потебня の著書には Ф.И. Буслаев の引用も多く認められており、品詞分類についても一部見解の違いはあるが Ф.И. Буслаев など既存の見解を発展させている事は伺え、数詞を個別の品詞とみなす考え方は既に行き渡り始めた段階にあるものと見受けられる。

19世紀の時代はロシア語文法研究が盛んになり、詳細な記述による文法研究書が複数刊行され始めた時期でもある。それに伴い品詞分類に関する研究も進み、Н.И. Греч, А.Х. Востоков, И.И. Давыдов など著名な言語学者達によって様々な見解が生み出されたが、それぞれ異なる考えが示されるなど、この時代にはまだ定まったロシア語の品詞体系は確立していなかった事が伺える。また、数詞の品詞分類の扱いについても文法書によって様々であり、同時期に異なる見解が混在していた事も見て取れる。19世紀前半に Н.И. Греч, А.Х. Востоков によって執筆された文法書はその後も幾度か改版され、中には加筆や修正の見直しが入れているものもあるが、19世紀半ばに刊行された改訂版においても、品詞分類や数詞に関する見解

⁵⁶ 詳細に см. Потебня А.А. Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т4, Вып.1. С.285-287

⁵⁷ 詳細に см. Потебня А.А. Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1977. Т 4, Вып.2. С.7-286

⁵⁸ 詳細に см. Потебня А.А. Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т 4, Вып.1. С.171-181

⁵⁹ 詳細に см. Потебня А.А. Из записок по русской грамматике: В 4 т. М., 1985. Т4, Вып.1. С.122

は全く変わっておらず、数詞は他品詞の中に含まれた扱いが取られている。しかしそのような中で、19世紀半ばには И.И. Давыдов が数詞を独立した品詞として分類を行っており、これは現代ロシア語における品詞分類が示す論理的体系に近付く大きな前進であったといえよう。И.И. Давыдов の見解はその後 Ф.И. Буслав などの研究において継がれていき、数詞は個別の品詞とする見方が広く行き渡るようになっていったと考えられる。

5. 結び

ロシア語文法における品詞分類とりわけ数詞の分野に関しては、未だ十分な研究がなされておらず、品詞としての数詞の成り立ちについても明確に示されていない所がある。言語における重要な概念の一つでもある数詞の品詞化に至る過程の解明は緊急の課題であり、その為、本研究ではロシア語の数詞の品詞が誕生した時を明らかにすべく、歴史的な文書を元に辿る取り組みを行った。ロシア語において数詞の存在は古くから認識されていたが、言語の品詞体系を成す独立品詞として数詞を位置付ける記述は、19世紀半ばの И.И. Давыдов の文法書において初めて確認できた⁶⁰。

18世紀の М.В. Ломоносов によるロシア語における最初の本格的な文法書の出版に始まり、19世紀の文法研究が活発化するまでの芽吹きから開花の時期を経て、数詞は独立品詞化されるに至り、19世紀半ばはロシア語文法研究の過渡期ともいえ、並行的に様々な数詞の扱いが混在した時期もあったが、19世紀後半にかけては徐々に整備され、品詞としての数詞の認識が浸透して行った様子が見受けられる。ロシア語における数詞は名詞、形容詞、副詞的な性質を持ち合わせ、また数詞によっては格変化形が異な

⁶⁰ 本研究では、ロシア国立図書館（Российская государственная библиотека）に重ねて足を運び、各年代における複数の歴史的な文法書や文献を調べて推進させた。

るという形態的な複雑性も見られる事などから、歴史的文法書の中においても数詞の品詞分類には多様な見解が現れ、独立品詞としての数詞の誕生に辿り着くまでには暫しの時を要した。

ロシア語の品詞分類体系はこれにより確定したというわけではなく、この後20世紀に入りさらに文法研究が栄えていく最盛期において、幾多の文法書が刊行され、さらに研究手法も多様化し多面的な考察が行われる中で、品詞体系の研究にも広がりを見せ、より様々な見解が示されるようになる。今後においてはそれら20世紀以降の文法書を辿り、ロシア語の品詞分類の変遷に伴う数詞の誕生から定着に至るまでの過程の考察を行い、続編にて別途報告したい。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、恩師であるモスクワ国立大学大学院 M.B. Всеволодова 教授には、多くの貴重なご助言をいただきました。深厚なるご指導を賜りました故 M.B. Всеволодова 教授に心より感謝申し上げます。

また本稿執筆において、北海道大学および北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センターの所蔵図書を共同利用させていただきました事に御礼申し上げます。